

武蔵野日曜集会

出て来い

――ヨハネ伝第11章――

1968年2月11日

小池辰雄

この病は死に至らず 我よび起こさん為に往く なんじの兄弟は甦えるべし 我は復活なり生命なり イエス涙をながし給う 父よ我にきき給いしを謝す 「原始力」(新聞連載の第二回) 出て来い ヤイロの娘の復活 『死に至る病』 妙蓮尼の本復 キリストは復活せざるを得ない ひと 我々の罪の処断 十字架と復活の永遠の生命 霊的法則の世界 本当の人間形成 すべての人の涙がごとく拭われるとき 神の国の建国記念日

【ヨハネ11・1～44】

1 爰^{こゝ}に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。2 此のマリヤは主に香油^{じかみけ}をぬり、頭髮^{かみのかげ}にて御足^{みそ}を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。3 姉妹ら人をイエスに遣^{つかわ}して『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。4 之を聞きてイエス言ひ給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』5 イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。6 ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日留り、7 而してのち弟子たちに言ひ給う『われら復ユダヤに往くべし』8 弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを石にて撃たんとせしに、復かしこに往き給うか』9 イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに蹟^{あと}くことなし。10 夜あるかば、光その人になき故に蹟^{あと}くなり』11 かく言いて復^{また}その後い給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』12 弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒^いゆべし』13 イエスは彼が死にたることを言ひ給いしなれど、弟子たちは寝^いねて眠れるを言ひ給うと思えるなり。14 爰^{こゝ}にイエス明白^{あらかわ}に言ひ給う『ラザロは死にたり。15 我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許^{もと}に往くべし』16 デドモと称うるトマス、他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

17 さてイエス来^{きた}り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。18 ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離^{へだたり}なるが、19 数多^{あまた}のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。20 マル



タはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。
21 マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。』22 されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』23 イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』24 マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』25 イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。』26 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』27 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』28 かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。29 マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。30 イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。31 マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に随えり。32 斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。33 イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、34 『これを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』35 イエス涙をながし給う。36 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』37 その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』38 イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給う。墓は洞にして石を置きて塞げり。39 イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』40 イエス言い給う『われ汝にもし信ぜば神の栄光を見んと言ひしにあらずや』41 ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給ひしを謝す。』42 常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜしめんとてなり』43 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、44 死にしもの布にて足と手を巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言い給う。

45 斯てマリヤの許に來りて、イエスの爲し給ひし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、46 或者はパリサイ人に往きて、イエスの爲し給ひし事を告げたり。

47 ここに祭司長・パリサイ人ら議會を開きて言う『われら如何に為すべきか、此の人おおくの徴を行ふなり。』48 もし彼をこのまま捨ておかば、人々みな彼を信ぜん、而して 로마人きたりて、我らの土地と國人とを奪わん』49 その中



の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言う『なんじら何を知らず。50 ひとりの人、民のために死にて、国人すべてくくにびとの滅びぬは、汝らの益なるを思わぬなり』51 これは己より云えるに非ず、この年の大祭司なれば、イエスの国人のため、52 又ただに国人くくにびとの為のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん為に死に給うことを預言したるなり。53 彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。

54 されば此の後イエスあらわ蹟にユダヤ人のなかを歩み給わず、此処を去りて荒野にちかき処なるエフライムという町に往き、弟子たちと偕に其処に留りたもう。55 ユダヤ人の過越すぎこしの祭近づきたれば、多くの人々身を潔めんとて、祭のまえに田舎よりエルサレムに上れり。56 彼らイエスをたずね、宮に立ちて互に言う『なんじら如何に思うか、彼は祭に来らぬか』57 祭司長・パリサイ人らは、イエスを捕えんとて、その在処ありかを知る者あらば、告げ出づべく預て命令したりしなり。

●この病は死に至らず

1 爰こゝに病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。2 此のマリヤは主に香油けしきをぬり、頭髮かみのかげにて御足を拭ぬぐいし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。

ラザロ、マリヤ、マルタというのは兄弟姉妹の関係です。しかも、このマリヤはこういうマリヤであつたということが特に書いてある。この11章の記事はヨハネ伝特有の記事でありまして、他の共観福音書にはない。非常にキリストに深い救いを受けたマリヤのその兄弟です。

3 姉妹ら人をイエスに遣して

イエスはペレヤに居られたわけですが。

『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。

この「愛する」という字は「フィレオ」という、「フィラデルフィア」の「フィロス」という、肉親の愛のようなときによく使う言葉です。キリストがいかにこの兄弟のように、自分の子どもや娘のように愛していたか。キリストも我々と同じ人間ですから、いろいろな感情を持っているわけです。特に親しくしておられたわけです。

4 之を聞きてイエス言い給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』

と。まず普通の人は発することのできないことを言われる。

「この病は死に至らず」

と。だいぶ危篤きとくだというわけだが、この場合の「病む」というのは非常に重体の意味を持つ



っている。

「いや、死なない。神の栄光のため、神の子の

即ち自分がまた

これに由って栄光を神さまから受けるためである」

と。

⁵ イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。

この場合の「愛する」という字は「アガパオー」という一番高次の意味の愛するという字が今度使われている。

この「愛する」「アガパオー」は、名詞では「アガペー」ですが、愛するとは「救う」ということです。感情的にどんなに愛しても、それは「アガパオー」にはならない。私たちが

「神さまに愛されている」

というのは、

「いつも救いにあずかっている」

ということ。仏教的な言葉でいうと「慈悲」であります。慈悲の対象である。それがこの「愛する」という意味ですから。

「神は独子^{ひとりご}を賜うほどに世を愛したまえり」

という。「独子を賜うほどに」というのは、独子を本当に与えるほどにまで世を救わんとされたことが、この「世を愛する」ということ。ヨハネ伝3章16節の有名な言葉です。あの「独子を賜うほどに世を愛する」というような言い方のときに、すぐこれを一人称と二人称の關係に感じて読まなければダメですよ。「世」というと、三人称みたいに響きますけれども。世のうちの一人が自分ですから。自分のために独子を賜うたと。

⁶ ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日留り、

これはちよつとおかしいですね、もう重体だというのに。跳んで行けばいいのに、キリストは落ち着いている。自分がいたこのペレヤという所にまだ二日も留まって、

⁷ 而してのち弟子たちに言い給う『われら復ユダヤに往くべし』

ユダヤは南の方ですが。

⁸ 弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを石にて撃たんとせしに、復かしここに往き給うか』

「⁹ 讀言^{よみごと}を言う」といって、キリストを殺そうとしたが、捕らえようとしたが、その手を逃れてイエスは去って行かれた。

「また同じ方向へ向かつていらつしやいますか」というわけです。



●我よび起こさん為に往く

9 イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに躓くことなし。10 夜あるかば、光その人になき故に躓くなり』11 かく言いて復^{また}その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』

「私が光だ」

という気持がその言葉の奥にあるんです。

「光なる私を受けとりなさい。まだ地上にいるうちによく私を受けとりなさい。私がいなくなったら暗くなるぞ」

と。そして、イエスは再び大きな光をもつて臨んできますけれども。受くべき時に受けるものを受けなかったら、非常なそれはマイナスである。キリストの意識の中にはいつも、光、太陽というものがある。

「昼のうちに、日の暮れぬ前に」

という。

「われらの友ラザロは眠った」

と。ラザロを「わが友」と言われた。あなた方もキリストから、

「わが友よ」

と言われていると思ってくださいよ。

「されど我よび起こさん為に往くなり」

眠ったから、目を覚まそうと思つて行くんだと。

「われらの友ラザロは眠れり」

というのは――まさに「永眠」という言葉がありますね――永眠状態になつてしまったんだと。「眠った」という言葉をもちろんそういう意味で使つたわけです。けれども、それを呼び覚ますために。しかし、この「眠る」という言葉を弟子たちは――キリストが「眠る」と言つたのは、本当は死んだことを「眠る」という言葉で言つたのを――分からないものだから。いつもそんな調子です。

12 弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』

眠つたくらいのことなら、また癒えるでしょうと。

13 イエスは彼が死にたつことを言い給いしなれど、弟子たちは寝^いねて眠れるを言い給うと思えるなり。

重体で昏睡状態に陥っているくらいのことだと思つたわけです。昏睡状態から目覚めさせようと思つたところが、そうじゃない。

14 爰^{こゝ}にイエス明白^{あらわ}に言い給う『ラザロは死にたり。』

普通概念で死の状態なんだと。



¹⁵ 我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、

「かえつて私はいなくてよかったよ。そうしたら、いわゆるお前たちが眠ったという状態から起こしたかもしれないけれども、もうひとつ質の違った状態に実は入ってしまった。かえつてよかったね」

なんて、もの凄い自信であります。

汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』

お前たちがダメだと思っているが、行くんだと。

¹⁶ デドモと称うるトマス、

「デドモ」というのはギリシア語で「双生児」の意味です。双子の一人だったわけです。

他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

妙なことが書いてある。行つて死んで、そして、じゃあキリストに甦らせてもらおうか、なんていうわけだ。

●なんじの兄弟は甦えるべし

¹⁷ さてイエス来り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。

まあ大変なことです。死んでから三日目どころじゃない。四日目だ。キリストの甦りは三日目でありましたが、このラザロは四日目だと。

¹⁸ ベタニヤはエルサレムに近くして、

少し南東の方にあります。今はヨルダンの方にある。

二十五丁ばかりの距離なるが、

ギリシア語では十五スタデヤという。

¹⁹ 数多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来り。

まあ可哀相だから、とにかく死んだから慰めてやろうと思つてやってきた。

²⁰ マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。

マリヤというのは動きにくい方だね。この前もそういうことがあった。マルタとマリヤの有名なところに、マリヤはじつとしていてキリストの話を聞いている方で、マルタの方は直ぐに動きだしてご馳走の用意をしたりいろんなことをする方だ。活動的なんだ。これを出掛けて行つてしまふ。マリヤの方はじつとしている。このマリヤの方は特に悲しみが強いらしい。動けないんだな。失望落胆してしまつてね。

²¹ マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。』

仮定法の言い方です。



「もしいらつしゃったならば死ななかつたものを。いらつしゃらなかつたから死んじやいました」

と。

22 されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』

なかなかマルタというのは、しかし、しっかりしてますね。

「私は知っている

この場合の「知る」はもう「信ずる」と同じことです

何事も神に願ひ給うとも

このキリストなら何事をお願いなつても

神は与え給わん」

と。

23 イエス言い給う『なんじの兄弟は甦よみがえるべし』

「生き返るぞ」と。「甦よみがる」という日本語は「陰府よみからかえる」という意味だね。死の状態からまたもとの生の状態に立ち返る。

24 マルタ言う『おわりの日、復活よみがえりのときに甦よみがえるべきを知る』

ところが、この信仰が、よかつたが、少しまだずれていた。今じゃない、終りの日にと。

「復活のときに甦よみがえる。すべての人が甦よみがえるときがくる。悪しき人は甦よみがえつて地獄に落とされる。善き人は甦よみがえつて天界に行く」

と。それまでは仮地獄、仮天国というわけで、審判を受けて、本地獄か本天国かのどちらかに定められるわけだ。

● 我は復活なり生命なり

25 イエス言い給う『我は復活よみがえりなり、生命いのちなり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。

26 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠とこしえに死なざるべし。汝これを信ずるか』

もうこれくらいはつきりした言葉はない。永遠の生命。25節、26節は福音書の中の最も大事な言葉の一つであります。

「我は復活よみがえりなり、生命いのちなり、我を信ずる者は死ぬとも生きる」

と。誰でもみんな死にます。すべての人は死なざるを得ずという。けれども、

「我を信ずる者は

そういつた死ぬという必然性を持ちながら、

死んでも生きる。

という。

凡そ生きて我を信ずる者は、

今生きながらにして我を信ずる者は、



永遠に死なない。汝これを信するか」

と。死が死ではないぞ。永遠に死なないと。

²⁷彼いう『主よ然り、なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信す』

なかなかはつきりしてます、マルタは。

「主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信す」

とはつきり、信仰告白した。ペテロよりかえらいくらいなものだ。大体、女性の方が率直に神の世界に入る。男性はすぐ妙な理屈ばかり考えているから、なかなか本当のものが受けとれない。大体、どの集会でも女性の方が少し多いというのはそういうところからもきているわけだな。男性諸君はしつかりしてくれなくては困る。

²⁸かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて

「ひそかに」というのは、ユダヤ人がいつも反対のやつがいますからね。そこで「ひそかに」というわけです。

「先生がいらっしゃって、お前さんと呼んでいますよ」

と。

『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。²⁹マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。

「じゃ、お呼びなら参りましょう」というわけで。

³⁰イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。

距離があるからね。

³¹マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、

マリヤをなんとか――悲痛落胆してますから――慰めていたユダヤ人、

その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思いて後に随えり。

「墓に行つてまた泣こうということなんだろう」と思つてね、

³²斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し

この平伏しの姿がここでもまた大事であります。

『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。

マルタと同じことを言つたな。せつかく待つていましたが、死んでから四日目にいらつしやつてどうもこれでは、というわけですよ。

●イエス涙をながし給う

³³イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、

新しい訳では、



「激しく感動し、また心を騒がせ」

と書いてあるが、ちよつとこの訳の仕方が――「感動する」というのはこういう時にちよつと我々の感じとしては、「感動」という言い方はちよつとおかしいように思うんですが――英語でいうと、「グローン」という字にあたる字で、激しい感情で「呻く」ことです。

「痛み悲しみて」

でいいと思う。

34『かれを何処に置きしか』

まああとの方の字は

「心を騒がせる」

というように意味の字です。だから、キリストのこここのところの気持には多少矛盾した感情が波うつていると思う。

「どこに置いたか」

という、その非常に問いかけの気持と、それから泣いているその姿と、その両方ですな。

彼ら言う『主よ、来りて見給え』

それで、連れて行つて、どうぞこちらでございまして。

35イエス涙をながし給う。

共に泣いたわけです。いかに愛していたかということがこれでも、人間らしい感情として涙を流されたわけです。キリストは涙を流して悲しんだといつても、一緒になつて悲しんでしまったら、これはおしまいです。キリストには別なものがある。うひとつその中にある。

36爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』

この「愛する」という字も「フィレオ」という字が使つてある。

37その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらし

むること能わざりしか』

「生まれつきの盲人の目をあけたような人が、死なさないでおれなかつたらうか」

と。と言つたつて、もう時間的にしようがない。いや実にキリストは、時間的にいいまでも、遠くから重体を癒そうと思えば、それは癒せますよ。だけでも、それをなさらなかつた。

38イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給う。

この場合の「心を傷めつつ」という訳は、傷んではいるけれども、キリストはもう深い祈りの世界に入っている。だから、痛みと同時に凄惨、死にうちかつところの力が、力の動きがその中にあるんですよ。それでなかつたら、キリストは死に負けてしまう。

墓は洞にして石を置きて塞げり。39イエス言い給う『石を除けよ』

ここらの状況をレンブラントがもうデッサンでいくつも描いている。このラザロの復活のところを。



死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』
事実、少し死体がおかしいというわけだな。

●父よ我にきき給いしを謝す

40 イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いしにあらずや』

41 ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう

この「目を挙げて」が大事な事です。大事な時によくキリストは目を挙げる。最後の晚餐のパンを裂く時もそうです。山上の垂訓の時もそうです。一瞥^{べつ}、天界に目をやると、もうそれは父なる神との交通、神の力を受ける。朝顔のごとく、向日葵^{ひまわり}のごとく、太陽に向かって花をめぐらすような。これが即ち、

「イエス目を挙げて」

です。あなた方、山に行つて祈る時に、天を仰いで――「天」というのはただ自然科学的な空間じゃないですよ――本当にこうべを上げて両手を挙げて祈るような祈りもなさるといい。普通、プロテスタントは――カトリックもそうだか何だかしらんけれども――ただもううつむいて、なにか萎^{しお}れたような恰好して祈っている。それはそういう場合もあります。けれども、胸の前に合掌して祈る祈り方というのは、これは何も形ではないけれども、自然に上からの光を、力を受けるときに――光はうつむきではこない――そういうものに、自然にそうなってしまう。

目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。42 常にきき給うを我

は知る。然るに斯く言うは、傍^{かたわ}らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給い

しことを之に信ぜしめんとてなり』

なんて、なかなか説明みたいなのことをキリストは言われたが、珍しいです、こんなことは。

「父よ、我にきき給いしを謝す。常にきき給うを我は知る」

と、ここが大事な事です、この一言が。目を挙げて祈つて、「父よ」というこの一言のもとに――もう目を挙げた時に既に「父よ」なんだけれども――そうしたら、

「我にきき給いしを謝す」

ときたです。まだ何も起きないのにさ。だから、キリストが

「祈りたることは既に聴かれたとせよ」

という言葉はもう既にここにもキリストが自ら証しておられるわけだ。未来完了を現在完了にしてしまっている。

ヘブライ語というのは、未来完了も現在完了も過去完了もみんな同じだから。全部、完了形なんです。未完了と完了しかない。非常に現実的な言葉です。聖書は本当はアラミ語で書いてあればよかった。それをギリシア語で書いてしまったものだから、テンスが非常にやつかいなことになってしまった。そしてギリシア語が原文だなんてやっているから。そ



れは出来上がった聖書の原文はギリシア語でしようけれども、本来はもうみんなヘブライ語の方言のアラム語なんです。当時の世界語はギリシア語だったから、ギリシア語にしただけのはなしで、実はアラム語で言われた聖書です。私はアラム語の聖書を見つけて、アラム語の文法を勉強したいと思っていますくらいです。これはヘブライ語に近いからやさしい。

「既にきき給いしを謝す」

と。あなた方、こういうところを読んだときに感動しなければダメですよ。

「何ということだろう。私はそんなように祈っているだろうか」

と。冗談じゃないですよ。そうでなくて、一般に聖書の研究なんてやっているから、いつまでたっても聖書が遠いんです。

●「原始力」(新聞連載の第二回)

私は2月のキリスト新聞に「原始力」という題で四回連載している。その第二番目のところに、

「霊神から直接に受霊した最大の神秘家は東西古今に絶する神のひとイエスであった。神がどうのこうのと議論したり質問したりする者にはあのサマリヤの女と一緒に、「来てごらん」(ヨハネ伝4章29節)と言って、四福音書のイエスのもとに連れて行くのが最善の指示である。私には聖書はドラマである。このドラマは読者をその劇中に引っ張りこむ。この劇中に躍り込み、体当たりにその現実の人となろうとしないなら、絶対に劇の幕は開かれない。それなのに、聖書研究会といった角度で聖書を厳密に微に入り細を穿って解剖する営みのなんと多いことか。それでは聖書が与えようとしている霊的生命は断じて得られない。福音書のイエスにぶつかって、分かるの分からないのではない。あの驚くべき言動の前に文句なしにかぶとを脱ぎ捨て、平伏して降参するまでは、聖書の霊的現実には入れない。イエスはその言説に水を割らない。その行動は捨身である。どの一言も極限概念を持ったどん底的なものである。どの行為も根源現実のものである。しかも、彼の言動は大自然よりも自然である。ところで、あの神韻玄妙なる言、神出霊妙なる動の当体たる彼自身は、「私は自分からは何をする力もない」(ヨハネ伝5章30節)と言い、「私の教えは私のではない。私を遣わしなされた者のである」(ヨハネ伝7章16節)と告げ、「何で私を善きなどと言つか、お前は。善き者などはいないよ、神ひとりのほかに」(マルコ伝10章18節)などと論している。まことにイエス自らは、無力、無教、無善なる者。即ち無者で彼はあった。」

これが第二番目のところです。



●出て来い

そういう、徹底的に自分を投げ捨てたところのこの実存。彼が目をつけたら、目ばかりだけが天に行っているのではない――全存在が神の前に投げ入れられてある。であるから、

「父よ」

と言え、

「我にきき給うを謝す」

と、すぐこうくる。もうそれは電気の世界でも、もの凄い雷撃でもってバツとくるだろう。その電撃よりも素晴らしいこの霊撃をキリストは受けて生きている。そういうようなドラマですからね、もの凄い。そういう現実を生易しい気持では、あなた方は――それはここは坐りにくいからあぐらをかいていいけれども――魂は本当にキリストに立ち向かってなければ、それはダメですよ。

『父よ、我にきき給いしを謝す。』⁴²常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の為に、汝の我を遣し給いしことを之に信ぜしめんとてなり』⁴³斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』

大事なときにキリストは――わざと声を高くするのではないですよ――それはもう必然、そういう声になるんです。それでこれを私は今日は、

「出て来い」

と訳した。「出て来い」と言われた。口語訳では、

「ラザロよ、出で来なさい」

とある。「来なさい」でもわるくはない。「出て来い」なんていうとなんか喧嘩みたいだけれどもね（笑）。直訳すれば、「こちらへ出よ」という字ですが。

「ラザロよ、出で来たれ」

で結構です。出て来いと。

と呼びわり給えば、⁴⁴死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る、

顔も手拭てぬぐいにて包まれたり。

まず、四日目の死骸がですよ、一言、「出て来い」でもって、巻かれたまんまに出てきたというんですから、こんな現実には東西古今にありません。なぜ、キリストのことを最大の神祕家と言っているのか。これ以上の神秘的な驚くべき現実があるかと。

イエス『これを解きて往かしめよ』⁴⁵と言ひ給う。

⁴⁵斯てマリヤの許もとに來りて、イエスの為し給なひし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、⁴⁶或者はパリサイ人びとに往きて、イエスの為し給ひし事を告げたり。

またそういうやつが必ずいる。



●ヤイロの娘の復活

はい、これが一応、ドラマチックなラザロの復活の記事であります。もうひとつ参考に、復活の記事をちよつと見ておきましょう。これはヤイロの娘の復活のことでありまして、マルコ伝5章21節から43節――マタイ伝では9章に、ルカ伝では8章にありますが――マルコ伝が一番詳しく書いてある。これはマルコ伝の記事がもとです。

「²¹イエス舟にて、復^{また}かなたに渡り給いしに、大なる群衆^{おおい}もとに集る、イエス海辺に在^{いま}せり。²²会堂司^{つかさど}の一人、ヤイロという者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、²³切に願いて言う

懇願して言うのに、

『わが稚^{いとい}なき娘、いまわの際^{きわ}なり、来りて手をおき給え、されば救われて活くべし』²⁴イエス彼と共にゆき給えば、大なる群衆したがいつつ御許に押迫る。

²⁵ここに十二年、血漏を患いたる女あり。……

これはちよつと中間記事がありまして、これは省いて35節にいきまして、

³⁵かく語り給うほどに、会堂司の家より人々きたりて言う『なんじの娘は早や死にたり、争^いでなお師^{わづら}を煩わすべき』

もう先生を煩わせても仕方がないと。

³⁶イエス其の告ぐる言^{ことば}を傍^{かたえ}より聞きて、会堂司に言いたもう『懼^{おそ}るな、ただ信ぜよ』

この「懼るな」がよく出てきますね。懼れたり疑ったりしたらダメだと。自分の感情をも投げ捨て、自分の悟性や理性も投げ捨てることがこの信の世界ですから。疑うというのは、自分の悟性でもって判断しているから疑う。そういうものは投げ捨てなければ。「懼るな」というのはそういうことです。

「感情も悟性も投げ捨てろ。ただ信ぜよ」

ということだ、「懼るな」というのは。霊性をもって受けとれと。別な言葉でいえば、「お前の霊性を目覚ませろ。お前は一番大事な霊性が眠っているではないか」ということだ、「信ぜよ」ということは。

人間の一番中心は霊性、魂である。それが眠っている。魂が受けとることを「信ずる」といふんです。理性でもって信じようなんて思っているから、いつまでたつてもどうにもならんですよ。そんなものは理性でなんかで信じられるものでない。魂の霊性が受けとる世界が、「信ずる」ということ。霊性の世界にまた「靈知」というのがあって、普通の理性以上のものがある。これが奥義を窮めていく。靈知靈能を。能は力を持っている。

³⁷斯^{かく}てペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネ

このペテロ、ヤコブ、ヨハネはキリストの弟子の三本柱だ。

の他は、ともに往く事を誰にも許し給わず。



そこは非常に重大な場ですから。不信の者がそこにいると妨げになる。それは待てと。本当に自分を信頼している者と一緒に行く。そして、祈りの世界に入る。

キリストはもちろん一人で結構なんですけれども、彼ら三人の者にこの事態がどういものであるかを実際に見せてやっておかねえとね。やがて、ペテロもヨハネもヤコブも使徒として彼らが一本立ちとなって使われる。聖霊がくれば、そのときにキリストのなさったこと言ったことがみんなビンビンくるわけです。もう聖霊を受けた後は、それまでに躓いたり転んだりしたことがみんな本当に分かってくる。存在的に。そのためにキリストは見せておく。見せたり聞かしておくわけです。この三人はやがて使うぞと。

³⁸ 彼ら会堂司の家に来る。イエス多くの人の、^{いた}甚く泣きつ叫びつする騒を見

³⁹ 入りて言い給う『なんぞ騒ぎ、かつ泣くか、^{おきな}幼児は死にたるにあらず、寝

ねたるなり』⁴⁰ 人々イエスを嘲笑う。

あざ笑う。ルカ伝にもそんなことが書いてある。

「人々その死にたるを知れば、イエスをあざ笑う」

と書いてある。寝たなんて言っているけれども、あれはとんでもない認識不足だ。死んでいるのに、寝たなんて言つてと。キリストには、それは寝たとは思えない。

イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴える者とを牽きつれて、

その三人と、お父さんとお母さんはもちろん信頼していますから。

幼児のおる処に入り、⁴¹ 幼児の手を執りて

この場合は、「手をとって」と書いてある。

『タリタ、クミ』

これはアラミ語です、キリストの直接の言葉です。「タリタ」というのは「乙女よ」、「クミ」というのは「起きよ」ということ。「クーム」という字は「起き上がれ、立ち上がれ」ということです。

と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。⁴² 直ちに少

女たてち歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに^{いた}甚く驚きおどろけり。」

(マルコ5・21〜42)

このラザロの甦りと会堂司ヤイロの娘の復活の記事は非常に有名な記事であります。

●『死に至る病』

キルケゴールが『死に至る病』という本の始めの方に、ちょうどこのラザロのところを引っぱって書いてある。

「けれども、もし仮にキリストがラザロを甦らせなかったとしても、この病は、いな、死そのものさえも死に至るものでないということが同様に言われ得るのではなからうか。



さすがにキルケゴールですね。

キリストが墓の前に歩み寄って、声高らかに「ラザロよ、出で来れ」と呼ぶだけで、この病が死に至らぬものであることは確かである。しかしまた仮にキリストがそう言わなかったとしても、復活にして生命なる彼が墓の傍らに歩み寄ること自体が既にこの病の死に至らぬことを意味してはいないだろうか。そもそも、キリストがそこにいるということが、この病の死に至らぬことを意味してはいないであろうか。もし、ラザロが死人の中から甦らせられたとしても、その甦りが彼の死と共に結局終りを告げなければならぬとしたら、それはラザロにとって何の役に立とう。もし、キリストが彼を信ずるすべての人にとって復活であり生命であるのでないならば、それはラザロにとって何の役に立とう。ラザロが死人の中から甦らせられたが故に、そのためにこの病は死に至らずというのではなく、彼キリストがそこにいることの故にこの病は死に至らぬのである。けだし、人間的に言えば、死はあらゆるものの終りである。人間的に言えば、生命があるかぎりにおいてのみ希望がある。けれども、キリスト教的に解するならば、

福音的というならばということですね、

死は決してあらゆるものの終りではなく、それとても一切なるものの内部における、即ち永遠の生命の内部におけるひとつの小さな出来事であるにすぎない。

「死というものは永遠の生命の中のちょっとした躓きみたいな出来事で、何かあらんと、なかなかキルケゴールはつきりした信仰がある。

キリスト教的に解するならば、単に人間的な意味におけるよりも無限に多くの希望が死のうちに存する。それはただ単に生命があるだけではなく、その生命が健康と力に満ち溢れている場合におけるよりも更に多くの希望がある。云々」

と、非常にキルケゴール式の掘り下げでもって書いてある。これは名著です。では、

「死に至る病は何かというと絶望である」

ということ、絶望のことが非常に詳しく書いてある。

● 妙蓮尼の本復

今度はもうひとつの例を引っぱっておきましょうかね。日蓮さんの伝記を読んだ人は知っていると思いますが、日郎という自分の弟子に語ったという言葉です。

「天に月なく日なくば草木いかでか生ぜんや。人に父母あり一人を欠かば子供らは育ち難し。我十二の歳、清澄に居り、十八よりは諸国に旅寝して八宗十宗を究め

いろんな宗派のことです。

三十二の歳、故里に帰り、我がための日月なる父母を拝みたりしが、また鎌倉に到り来り、実相寺の経蔵に入りて、一切経に眼を晒せる折、日輪にも比ぶべき父を失い、

非常に日蓮というのは親孝行の気持を持っていて、父母を敬えというけれども、モーセの十誡そのものの親孝行の彼であった。

その時汝を率いて故里に帰りしは昨日の如くにして早や一年を過ぎたり。
この日郎に言っているわけです。

離島に流罪の折節も夜々夢は故里を廻り、母上いかにといい煩わざることなし。いかに月輪の

即ちお父さんを日に例え、お母さんを月に例えているわけです。

母上おわすやと恋しく慕わしく懐かしければ、再び故里に帰り母上の安否を伺い、且つは亡き父上のお墓にも供養致したいと存ずる。この度も汝を率いて往かんと思う。旅の装い如何にせしや。薔薇の茎赤うなりたる頃、日蓮はその弟子日郎、日昭を伴いて房州に旅立つ。目に入る山陽水色いずれも懐かしく日蓮気も足も急かれて我が家の門に近付けば、家内に人の出入り繁く、針よ薬よと言ひ罵る声に日蓮胸騒がしく、何の起これるぞと問えば、この程来、妙蓮尼

お母さんのことだね。

病の床に打臥しおわせしが、今朝方秋風の肌寒きにふと胸の支えのさし詰めて窒息状態になった。

今絶え入れりと云う。

今、息が絶えたと言った。

日蓮驚きて馳せ寄り、日蓮にて候と耳に口当て声を限りに叫べども呼べども亡き魂のそれと応うるに由なし。日蓮この床のべに端然と坐し丹精を凝らしてお経を誦読し、この経の功德を以て再び蘇生し給えと肝胆を砕きつつ祈りけるに、愛児の心の誠は慈母の懐に通じ、病即消滅の文

「病即消滅」というお経の文句がある。病が直ちに消滅する。

に至って縷の如き氣息出で

縷々としてという、細い糸のように息がでてきて、

次第次第に回復し目を開き、たなごころ掌を合わせて、南無妙法蓮華經と唱う。

お母さんがね。

日蓮が日々夜々衣を脱がでの看護に日ならずして妙蓮尼は本復せり。」

と。日蓮さんはお経を読んで、そして一生懸命で祈ったら、お母さんが息を吹き返したと、そういう事実があるわけです。このキリストの場合はもちろん、ただ一言、四日もたった死者を、「ラザロよ、出で来たれ」と言われたら、出てきてしまった。桁が違います。

●キリストは復活せざるを得ないひと

キリストがさきほど言われた、



「我は復活なり生命なり、我を信する者は死ぬとも生きる」

と。あのサウロ、のちのパウロはキリストを信する者を迫害していた。ダマスコ途上でこの復活であるところのキリストが現れて、

「なんぞ、我を迫害するか。刺ある鞭を蹴るはかたし」

と、パウロはすっかりこのキリストに撃たれて、参ってしまった。このキリストの霊によって彼自身が仮死状態ですね。それから按手によって、アナニヤによるところの聖霊の力で彼は目が醒めた。

「わが目より鱗の如きもの落ちたり」

と。彼は、だから、一遍死んで生き返ったようなものです。これは完全に御霊の力です。神の霊の神霊の力で起こった事実です。この場合のラザロの甦りにしたところで、ヤイロの娘の復活よみがえりにしたところで、みなこれはキリストを通して現れてくるところの聖霊の力です。

だから、普通の信仰では、いくら聖書の記事がこうありまして、

「ああ、そうでしたんでしょか」

なんてなわけだ。

「我は復活なり生命なり」

というキリストの言葉が響かない。

今、キルケゴールが言ったように、

「そこにいることが即ち復活である。ラザロが甦らなくても、キリストがそこにいることがもうそこに根源的にはラザロは甦りの力をいただくことになる。また死んでも、そんなことはどうでもいいんだ」

と。そこに来なかったならば。

要するに、このキリストの復活のことを、まあいろんな本にいろんなことが書いてある。いくら信じようとしたって、なかなかどこかこれは譜に落ちない面が普通なら残る。キリストの甦りは、

「キリストはもう復活せざるを得ないひとである。これが復活しなかったら、一体何がキリストか」

ということが本当に言えなかったら、皆さんは、このキリストの

「我は復活なり生命なり」

ということを本当に受けとっているわけではない。キリストが甦らなかったらば、もう一切はただ教えにすぎない。一人の偉大な宗教的な偉人くらいなものであります。救い主ではない。

●我々の罪の処断

我々をキリストが「愛する」とは、そのような「救う」ということ。救うとは即ち、

「霊肉渾然として永遠の生命の中に入れる」

ことである。キリストの救済の愛の、本願の生命が我々の中に入ることが救いである。これはどうしても聖霊を受けなければ、その救うということの、救われているところの内容が本当につかめない。この聖霊を受けなければ、またキリストが甦りの生命であるということが分からない。

「よみがえる」という言葉がそもそもおかしい。

「我は生命なり」

でいいんです。キリストは、なるほど十字架にかかって一遍、贖罪の大業をしなければならなかった。キリストはなにも死ぬひとではなかった。これも普通の神学者や牧師さんが本当に分かっていないようです。

彼は死ぬひとではない。もうその肉体が霊化してしまつて、いきなり天界に入ることのできるひとです。我々と同じ肉体を持ちながら、それが霊化することのできる驚くべきひとである。これが死ななければならなかったということは、贖罪のための他の何ものでもない、キリストの死というものは、他のいわゆる殉教の死とは違う。彼自身はもう生命そのもののなんです。生命そのものが贖罪のためにどうしても一遍、汝らの罪を完全に担う。そのためには神の審判を徹底的に受ける。

その点でははつきりと我々は死を受けなければならない者だ。断罪されなければならない者が、それが無罪放免ということですから。そのためには単なる観念ではならない。単なる赦しではならない。そこに我々の罪の処断ということがはつきり事実をもつてなされなければならない。これがキリストの十字架です。十字架によって完全に罪の処断ができている。

そのキリストの恩寵を受けとらなかつたら、これはいわゆる絶望ですよ。キルケゴールのことを別な角度からいえば、我々は本当は絶望者なんだ。自分につけるかぎり絶望者でいい。また絶望者にならなければ本当に受けとれない。けれども、手放して絶望すると気がおかしくなったり、へたすると自殺したりする。

人間の側のどのような状態、自分がどうであるかであることはもはや本当に問題でない。このキリストの十字架の贖罪の贖いというのは、もはや問題なきものに、皆さんは、根底的にされているわけです。何が起ころうとも大丈夫です。

●十字架と復活の永遠の生命

それは十字架で完全に贖われていることの本当に分かるのは、パウロがまず復活のキリストにでつくわして、自分が撃たれてみたら、キリストの十字架が何であるかが分かつ



てきた。そうして、パウロは

「この十字架の他には何も語るまじ」

と言い出した。パウロが「この十字架の他には」と言い得た原因はどこから来たかというところ、実は復活のキリストから来ている。パウロは聖霊を受けたから本当に言えるんだ。

「十字架を本当に受けとらなければ聖霊を受けとることができない」

と、私は申します。それと同時に今度は、

「聖霊を本当に受けとらなければ、また十字架が本当に身に沁みてこない」

ということも言える。時間的にはどっちが先でもいいけれども。要するに、この十字架と復活の生命、永遠の生命というものは、これは離すことができない。死生の転換というのはね。この復活のキリストがその御霊の力でもって神の霊の生命、霊生をもってラザロに本願の憐れみがかかったから、これが甦った。

私たちは何を信ずるかというと、死人が甦るということを経験するのではないですよ。キリストがいかに復活の生命であるか、キリストがいかに永遠の生命であるか、ということを受けとれということなんです。

「栄光が神さまに、また自分において神の栄光が現れんがために自分は喜ぶ」

とキリストは言っておられる。ひとつの奇蹟をみんなが喜ぶ、死人が甦るという奇蹟を喜ぶということではないんですよ。奇蹟を現したのは、奇蹟的な驚くべきことを現したのは、

「神の生命の世界はたとえばこのようなものだ。しかし、その現象に囚われるなよ」

と。その点でキルケゴールが、

「たとえ甦らなくてもキリストがいることが」

という。まさにその通り、あれは真理です。

●霊的法則の世界

そういうわけで、私たちはこのキリストの福音書における様々の、もう各頁に表れているようないわゆる奇蹟的な現象も実は奇蹟ではない、と私は言っているでしょ。霊的法則の世界だと。霊的法則の神の意志が働けば自由自在の世界だ。奇蹟なんて言うな。また、現象を追い求めて、現象ばかり一生懸命で追い求めて、ただ病の癒えんことのみに執るような信仰だったら、これは御利益信仰です。けれども、本ものがくれば、病も癒えますよ。本ものがなかったら、何も現象しませんよ。そういうような本末転倒なつかみ方をしないように。そうしたら、たとえ治ろうが治るまいが、どちらにしろいいよ信仰は深くなっているだけのはなしです。

それが本当の根源の現実をつかまえているところの事態であって、それは神の霊がきて――私たちはいくら聖霊を受けても、いきなり聖人にはなれない。相変わらず躓いたり転んだりするやつなんだ。けれども、それにもかかわらず、一向失望しない――どんなこと



があっても展開していくというのが、これが本当の救いの姿です。本当の証の姿です。そしてそれが必ず本当の満月になることを確信している。

「まだ私の信仰は、まだ聖書の勉強が」

なんて、そんなことを言っているのではない。人がどう思おうが、そんなことはどうでもいい。

「自分の中で展開してくるところの神さまのこの聖霊の生命の事態をいかんせん」

ということなんです。そういう本当の力強い信の世界に、皆さんは入ってくださいよ。

これは皆さん、無条件にこの聖霊は受けとっていらっしやるんだ。徹底的に贖ってください。さったんだから。

「さあ、飲みなさい」

というから、私はこの水を飲むんです。これが聖霊を受けると同じことです。皆さん、水は誰でも飲めるでしょ。誰でもが聖霊を飲むことができる。それをなにか、聖霊というものはなんか特別なもので、少し祈りでもあれしなけばなんて、なにか祈りの熱っぽいことが聖霊ではないんですよ、なにも。それはしかしながら、もちろん祈りを通さなければ聖霊は来ない。しかし、祈りということがなにも、言葉でなにか祈っていることばかりが祈りではないけれども。じっとして何とも言わなくなつて、心の中で「父よ」と叫んでいることがもの凄いい祈りですから。霊界の天をふり仰いで、

「父よ！ 主よ！」

と言えば、直ちに聖霊の世界なんですよ――もう仕方がない、言葉は――それが本当の力強さなんです。

そうしたらもう、永遠の生命が何であるのかんであるのなんて言う必要がない。それがちゃんと来ているから。

「いいです、私は決して死にません。『死んでも死なない』とキリストが仰つたが、

その通りです」

と聖霊の人は言える。御霊を、キリストの生命をいただいているから。自分の信念とかそんなことではないんだから。

ラザロは死んでいたけれども、みんな生きていると思つたらとんでもない。我々はみんな死んでいるんだ、本当は。死んでいるんだから。

イザヤ書30章のところに、

「後べから語りたもう」

とある。あれは面白い言葉です。後べからキリストは

「私だよ」

と、また一歩前に「私だよ」と。また実に私たちの胸の中で「私だよ」と言ってくださいつている。それに気がつくだけの人はなしです。



そうしたら、自分から出てこなければダメです。自分を閉まっているからいかに。「出て来い」というのは、みんな自分という墓の中に入っているから、キリストが「出て来い」と言う。「出て来い」と。だから、私はさっきここで祈りながら、何と標題を書こうと思った時にパツと来たわけです、「出て来い」が一番いいと。

そういう、「出て来い」ということ。自分から本当に乗り出して来なくては。「自分自身の殻の中から出て来い」という。

● 本当の人間形成

私は大学でいろんな学生に教場でも言いたいことを言っている。なかなか、しかし、出て来ないんだ。なにか「宗教」、「キリスト教」というと、特別な妙なものだと思っている。とんでもないですよ。一番近いもので、一番大事で、一番密接したところの、内接すればやまないとこの事態であるということに気がつかないからね。

今はとにかく、とやかくと思索しているときではないんです。もう20世紀の後半は深刻な現実ですよ。どういうことになるか分からん。けれども、どうも自分は本当のものを持っていないというならば、なぜ体当たりしてこないか。私は集会しているのは、おぎなりでやっているのではない。本当は、学校でもこれくらいのことをやりたいけれども、学校でやると伝道になるから、まあ教場ではブレーキをかけてますけれども。まああるときは時々、爆発するけれどもね。

ことにこの福音に接した若い諸君は、これから非常に重大な任務を負っている。しかし、聖霊があれば、男でも女でもひとつも恐いことはありません。

「汝ら、既に恐れなき世界にある。我なんじのうちにあり」

と、キリストに言われて、何をか他に言うことがありますか。

「我は復活であり生命であるから、私を受けとる者は」

という。「我を信ずる」というのは、

「私が復活であり生命である」

という事柄を信じたってダメですよ、そんなものは。

「キリストは復活である、生命である。あれは立派な人だ。神の子だ」

なんていう事柄を信じたって、ちつともそれは信仰ではない。信の世界は、いつも申し上げているとおり、交わりの世界ですから。

「復活であり生命である私を受けとる者は」

ということとは、別な言葉でいうと、この霊生を、聖霊の生命を――聖霊は即ち生命ですから――この御霊の我を受けとる者ということ。御霊の我は即ち、

「主は即ち御霊なり」



とパウロが言っているとおり。そうすればもはや、

「永遠の生命がどうであるかである」

なんていう議論はなにもいらん。

「私の中には永遠の生命があります。なんとすれば、キリストの霊が私の生命です

から、仕方がありません」

と、それだけの話です。

それだから、本当に簡単率直なことを、まあややっこしく、くどく、回りくねっているものだから、しまいにぼけてしまつて訳がわからなくなる。

えっ、どうですか。なんだかしらんけれども、うれしくてたまらなくなりましたか。

日蓮さんのお経の世界よりもっとと素晴らしい現実なんですよ、この福音のキリストの世界は。イエス・キリストはそうように、さつき言つたとおり、彼は無者となつたらば、無限者であつた、無量者であつた。なんとまあ楽しいことだろう、キリストというひとは。自分を何もつくりあげる必要はなかつた。「人間形成」なんていうけれども、何も形成しないでいいんだよ。しかし、それが本当の人間形成であるんです。

●すべての人の涙がことごとく拭われるとき

このラザロの復活の事実そのものを、まあ相対的現実そのものを見ましても、なんと桁違いなひとだろうと。イエスはしかも決して、人間でなくてはなかつた。深く悲しみ、泣きすら、涙を流しすらなかつた。この私たちの現実を本当にどん底から共感しながら、それを本当にその涙をことごとく拭い去ることの實力を持っている。だから、ヨハネ黙示録の中にも、

「すべての人の涙がことごとく拭われるときが来る」

とあるのはそのことです。これはキリストの、神の永遠の生命、喜びの生命が――さつきのイザヤ書60章もそうです――悲しみを喜びに変えるということ。それが本当にこの御霊の生命が私たちにきたらば、もう御霊は愛であり、かつまた歓喜である。喜びの音信とはまさにこのことです。

もうあと、ラザロは何年たつて死んだつて、そんなことはどうでもいい。事実の、このような事態であるひとつの徴が顕れたんです。私の中のこの生命は、たとえばラザロがこうやって甦るほどの力を持っている。神さまはそのようなかたである。

「お前たちはたとえ死んでも、決して死なないよ」

「はい、そうです。すみません」

と言えるんです。

どうぞ、そういう、福音書の現実が私たちにじかじかにいかに迫つて、イエス自身を彼は与えようとしているか。自分自身を私たちに本当に与えようとしておられるか。私たち



はあるがまま——あるがままですよ、何も取り澄ますことはないですよ——あるがままに投げかけていけば、みんな変質変貌されていくということ。いいですね。

●神の国の建国記念日

今日は、紀元節だという。私は門に日の丸の旗をたてた。右翼だなんて思われるかもしれない。私は右翼でも左翼でもない。日本の国旗は好きだから、おりがあれば立てる。さし昇る太陽を、日本の国旗を、胸に抱くんです。

キリストを本当に胸に抱けば、これはもう甦りならざるをえない。永遠の生命ならざるをえない。建国というけれども、イエス・キリストが地上に現れてこそ初めて本当の建国があった。神の国がここに建てられた。歴史は極限状況から突破されたんです。ある意味において、あそこで歴史はいつぱん終ったんです。断絶したんです。そして、新しい神の歴史がそこに、神の国がうち建てられた。

「天国は近づけり」

というでしょ。天国はやって来たと。彼自身がやって来たことが——彼は天国の主体だからね——だから、キリストによつて神の国はうち建てられた。我々は神の国の民である。全世界のいかなる国民も、受けとればみなこれ神の国の民である。復活の永遠の生命であるキリストを受けとるところに本当の私たちの建国があるわけです。昔の日本の建国祭がどうであつたつていいよ、そんなことは。けれども、日本の国が本当にこの建国の日を新しき意味をもつて、新しき内実をもつて受けとるならば、私たちは——他のクリスチャンはどうしているかしらんけれども——私はこの建国祭をそういったキリストの、我々の中に神の国を建ててくださった、その建国をそこに受けとつて、それであるならば、日本は本当に世界に救いをもたらせるところの驚くべき国となる。右でもなければ、左でもない。中道です、本当の中道。天国道です。無碍の一道です。

今の青年諸君がそういう高次なことに気がつかなかつたらダメだよ。もうなにかの手先になって、政治運動ばかりやってね、ちよつと授業料を値上げすれば、それをきっかけにワツシヨイ、ワツシヨイと騒いでみたり。

皆さんの中には、そういう意味における神の国がうち建てられ、一人ひとりとその大事な一員であります。ソ連でも中共でも何でもござれ、どこに対したつて本当の「メンシュリツヒカイト」「人間性」をもつて対することができ。超イデオロギー。イデオロギーを超えなければダメです。それぞれのイデオロギーは結構ですよ、いいですよ、みんなイデオロギーを持ったつて。そんなものに極限してこたわるからいかん。イデオロギーにはそれぞれ真理がある。けれども、その真理を本当に活かすためには、超イデオロギーの世界に入らなければダメなんです。だから、すぐ喧嘩する。イデオロギーというと同じ次元だから喧嘩する。もうひとつ上に出なければ。楽しくなつたでしょ。では、おしまい。

